Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-06-21

神戸市北区有野川流域の水車：明治期から昭和初期にかけて

永田，實
石川，照子
是永，恵

(Citation)
兵庫地理,49:31-44

(Issue Date)
2004-03-31

(Resource Type)
journal article

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90002449

神戸市北区有野川流域の水車

—明治期から昭和初期にかけて—

永田　實・石川照子・是永　恵

Ⅰ　はじめに

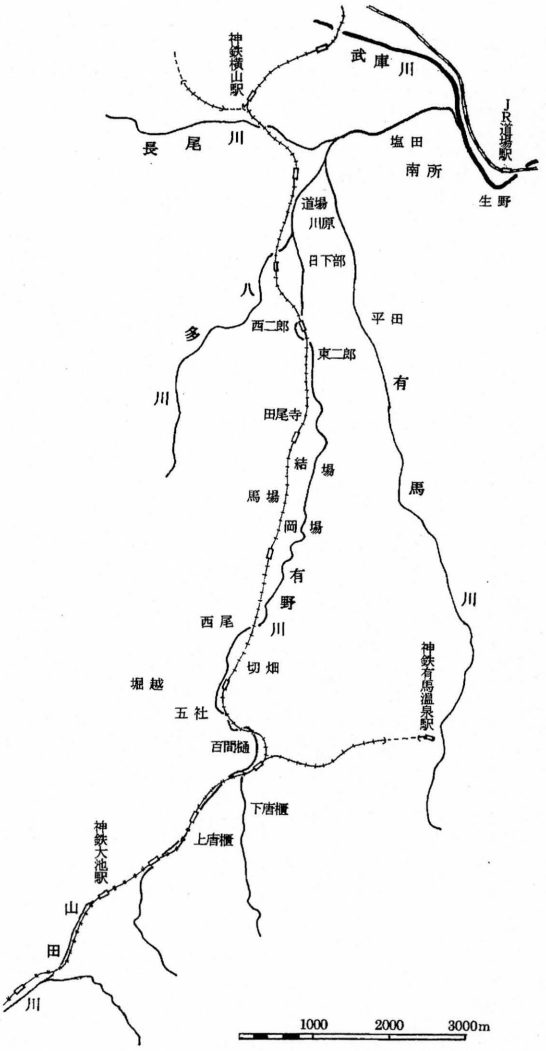
筆者（永田）は平成４年（1992），六甲山地北側の山田川流域の農業水利を報告[1)]した。その翌年同地域の水車について報告[2)]し，全部で43の水車があったこと，酒米精白用の点で六甲山地南麓の補完的役割を果たしていたこと，杉線香の原料作りにも使用されていたことなどを指摘した。残された課題として次の３点をあげた。第１は調査地域を山田川流域に隣接する地域へ拡大すること，第２にとくに六甲山地南麓の酒造家の史料を活用することでより定量的な考察を行うこと，第３に水車に関わった人間の営みを探求すること，であった。

前稿から 10 年がたち，それらの課題は残されたままであるが，課題の第１，すなわち調査地域の隣接地域への拡大を主眼に調査したので発表しておきたい。

Ⅱ　対象地域について

本稿の対象地域は，前述の山田川流域（加古川水系）の東に隣接し，山田川流域から分水界を東に越えた有野川流域（武庫川水系）である。行政区画でいえば，神戸市北区有野町と北区道場町に該当する。北区道場町は有野川の下流地域と，有野川・八多川とが合流する有馬川流域からなる。また明治時代中頃の行政区画でいえば有野村は有野川の流域に，道場村は有野川・八多川・有馬川の流域にあたる。

なお本稿の対象地域は有野川流域であるため，八多川や有馬川流域は対象ではない。しかし，有野川下流域の道場川原・日下部は同じ道場町内の有馬川流域の平田・塩田・生野などと深く関係するため，一部旧道場町の有馬川流域を含むこととする（第１図参照）。



第1図　調査地域の概観

ところで，この地域は山田川流域同様，長く六甲山地南の後背地的な役割を担ってきた。近代以降を概観しておこう。兵庫（厳密には神戸）開港以来，丹波・但馬から三田を経て神戸に往

第1表　神戸市北区有野川流域の水車一覧表　（一部有馬川流域を含む）

地区	旧村	No.	名　称	所在地	所有者	使用目的	臼の数・型式・方式など	変 遷 な ど	文献
唐櫃	上唐櫃	1	四鬼の水車	四鬼祥行家西	四鬼家	飯米	2～3	大水害で流失	
		2	小川の水車	小川敬司家北西	小川家	飯米、酒米も	2	大水害で破損	
		3	ゴヘエの水車	東本勲家南	現東本勲家	飯米、自家用	1、上掛式	降水時だけ	
		4	ブンザエモンの水車	東本純一家の田	現東本純一家	飯米	1	降水時だけ	
		5	下野の水車	下野勝弘家西	下野家	飯米	1	昭和25・26年まで	
	下唐櫃	1	辻井巳代治家の水車	下野川橋西南	辻井家	酒米	約50、上掛式	昭和10年代まで	旧版地形図
		2	辻井寛治家の水車	辻井寛治家東	辻井家	酒米	120、上掛式	大水害で破損	
		3	新兵衛車	下唐櫃公園北方	不明	酒米か	大水害で廃絶	大水害で廃絶	
		4	半助車	有野川右岸	西田家	酒米、製材	50、上掛式	大水害で廃屋に	
		5	四郎兵衛車	字弥五郎垣	新井家	酒米	80～100	灘に販売	
		6	山王神社東の水車	山王神社東	不明	飯米	下流し式	昭和30年代も稼働	
		7	南前の水車	6のすぐ北	南前家	飯米	4		
		8	キッタ車	7のすぐ北	南前家	酒米	20～30	住居に転用	
		9	ウワ溝の水車	北浦久司家東	北浦家	飯米	5、上掛式		
有野	百間樋	1	榎畑の車	榎畑家東	榎畑家	酒米(白鶴)	12～13	戦争中になくなった	旧版地形図
	五社	1	上車	五社駅東	切田家	酒米	約30	経営は村上家か当坂家か	
		2	中車	五社駅の線路	切田家	酒米	約30	経営は森家か	
		3	下車	五社寮あたり	切田家	酒米	約30	経営は榎畑家か	
		4	上新場	食楽堂本舗付近	前北家	酒米	約20	電気がきてやめた	
		5	下新場	五社インター北側	前北家	酒米	約20	廃業後人が住んだ	
		6	松本の水車	理髪店裏	松本米穀店	精米	約20	4～5年前まで小屋があった	
	堀越	1	九里田(栗田)の水車	堀越小橋北詰	辻下家(堀越)	飯米(共用)		小屋は昭和55年まで	
		2	池ノ谷の水車	字池ノ谷	岡田明家	飯米(共用)			
	切畑	1	切畑の水車	北向地蔵向かい	下浦・辻井・溝	飯(共有・共用)	4	婦人会の管理	
	西尾	1	西尾の水車	南部家	前北福松家	飯米(賃搗)	4(前2、後2)	渇水時のみ	
	岡場	1	コウジャグルマ	不明	不明			男衆5～6人がいた	
		2	岡場橋西水車	岡場橋西	不明	精米所	4		

地区	旧村	No.	名　称	所在地	所有者	使用目的	臼の数・型式・方式など	変 遷 な ど	文献
有野	岡場	3	東岡場共同水車	仲和弘家の下	共有	飯米(共用)	6	大水害で流出	
		4	前切の水車	有野町2315	前切家	飯米(共用)	3		
		5	二階の水車	甲北病院	二階家	飯米(共用)	3		
	馬場	1	萱の木元水車	西浦栄治家東	西浦家	飯米(共用)	2		
		2	畑中(坂口)の水車	畑中家の前	坂口米穀店	飯米(賃搗)	10	大水害の頃はなかった	
	結場	1	細井の水車	細井家の向かい	細井家	飯米(共用)	2	3つの臼を使い分けた	旧版地形図
		2	武田の水車	セラーハウス有野店	武田家	飯米・菜種		大正末には廃絶か	有野町誌
		3	橋本の水車	橋本家向かい	橋本家(精米業)	飯米	約10		
	田尾寺	1	田中酒造	田中酒造裏	田中家	冬季は酒米 飯米(賃)	水輪は6m、6つのギア、 石臼のあと清水式精米機	清水式になってからは 精米は2人で担当	
		2	キタモト寝装	戸崎	キタモト寝装	綿打・飯(賃)	渇水期は休止	動力がきてすぐやめた	
	東二郎	1	イバヤシの水車	川田鉄筋駐車場 付近	土地は伊勢講 小屋は灘の酒造家	酒米・飯米	30～40	冬は男衆が泊り込み	
		2	不明	小南省三家の下	不明	飯米・麦	10、不使用時は解体	縄ないも	
		3	不明	兵庫興農の位置	二郎の芝家か	飯米	8、50坪ほど	昭和10年頃まで	
		4	不明	北摂ガーデン付近	東山家か	飯米	4		
	西二郎		不明						有野町誌
道場	平田	1	木下の水車	木下米造家	木下家	飯・酒など	不明、下流し式	大水害までか	
		2	中前の水車	西之垣内	中前家	飯米	不明	昭和10年頃まで	
	日下部	1	共同水車	資材置き場	共有か	飯米・豆	不明	棉も栽培	
		2	米田の車屋敷	豊南パック南	米田家	飯米	不明	明治期まで	
	道場川原	1	泉仙の水車	道場郵便局裏	泉家	酒米	不明	明治期まで	
	塩田	1	塩谷の水車	新池の北	塩谷家	飯・餅・(酒)	6程度、上掛式、	昭和10年頃まで	旧版地形図
		2	大前の水車	字東城谷	大前家	飯米(自家用)	3程度	大正13年頃焼失	
		3	川北(前)の水車	塩田八幡参道入り口	前家	飯米	30～50、大規模だった	縄ないも	旧版地形図
	南所	1	中の水車	東矢木工の位置	中家	飯米	8	全焼再建、台風で倒壊	
	生野	1	喜多の水車	大東家	喜多家	飯米	臼5現存、		
		2	水車跡の呼称	生野駐在所そば	不明	飯米か	不明		旧版地形図

来する者がふえ，道路改修が問題となり，明治７年には車馬が通行可能な状態に拡幅された。明治 32 年には生瀬から三田を経て福知山までの鉄道が営業開始された。のちには政府に買収されて現在のＪＲ福知山線となったが，この鉄道と結びついて三田から有馬温泉を結ぶ有馬鉄道が大正４年に営業を始めた。いまも有野川沿いに一部鉄道敷を残している有馬軽便鉄道である。

この地域は明治時代から大正時代にかけて畜産や蔬菜栽培がさかんになったが，いずれも六甲山地南の市場を対象とするものであった。この農村地域が大きな変革するきっかけとなったのは，神戸有馬電気鉄道（現神戸電鉄）である。昭和３年 11 月に有馬温泉まで，同年 12 月には三田まで開通した。このほか昭和 30 年代には，神戸市・住宅公団・開発業者などが住宅地経営に加わり，開発が加速していった。あわせて六甲山地を南北に通じるトンネルもでき利便性を増した。有野川沿いには，上流から唐櫃団地・有野台団地・藤原台団地がならび，三田市とまたがる北摂ニュータウンもほぼ完成している。

このようななか，水車についての記憶は近年急速に失われているといえる。

Ⅲ　文献・旧版地形図などから

明治時代の全国各村の戸数・人口・学校・寺院など基本的数値を記した『徴発物件一覧表』[3]によれば，有野村全体の水車場は明治 20 年が 20，26 年が 25，30 年が 31 と漸増し，明治 36 年には９と激減している。なお，明治 24 年については，有野村内の地区ごとの内訳が，唐櫃村９，有野村 14，二郎村２，合計 25 と表示されている。

『有野村誌』[4]には水車の記載がないが，『有野町誌』[5]では有野町全体で 33 とされ，内訳は上唐櫃２，下唐櫃６，五社７，堀越２，切畑１，百間樋１，西尾１，岡場２，馬場２，結場３，田尾寺２，東二郎３，西二郎１である。また次の記述がある（原文縦書き）。

有野町では、どこの村でも飯米用の賃つき車や自家用車の一～二両はあった。また、菜種をしぼるものや綿をうつ水車もあった。このほか、醸造用の米をつく営業用水車が五社、下唐櫃に集中し、水車集落を形成して若衆が多く働いていた。これらの水車の発達は地元に田中・当坂両酒造の存在や六甲山を隔てて灘五郷を控えていたことによるものであろう。

旧版地形図でも検索したが，記載は多くなく，現地での聞き取りを中心にした。これら以外に，「有野村戸長役場古文書」[6]に水車関連の記述が若干見られるので，それぞれの地区の項で触れておく。

Ⅳ　現地での聞き取りから

聞き取り調査から各水車についての様相を記録しておく。水車によりその記述に明らかな精粗があるが、岡場などは他地域より早く開発が進んだためである。

なお各地区の主な分担は，唐櫃は永田，有野は石川，道場は永田と是永であった。また文中のハケとは臼，トユとは樋，大水害とは昭和 13 年のものを指す。

1　唐櫃

『有野町誌』[7]では「下唐櫃のある水車では，四代水車稼業を継ぎ最盛期には五両の水車を動かし百人余りの若衆を抱えていた。この水車には一両に五〇～一〇〇の搗き臼を備えていた」と記す。家数は上唐櫃が 90 数軒，下唐櫃は約 50 軒であったが，水車は逆に上唐櫃の方が少なかった。集水面積が小さく，地区内を流れる川の水量が少なかったからである。同じ理由で，上唐櫃には池が多いが，下唐櫃では少ないと聞いた。

１）　上唐櫃

①　四鬼の水車

四鬼祥行氏（昭和８年生）宅の西にあった。八王子川左岸（西岸）の 100m上流から溝をひ

き，川をトユで四鬼家の方に渡した。土地の人が自家米を交代で搗いた。ハケは２つか３つ。水量があったので，常時稼働していたようだが，詳細は不明。大水害で小屋ごと流されたが，残ったハケを使い，足で踏んだ。

② 小川の水車

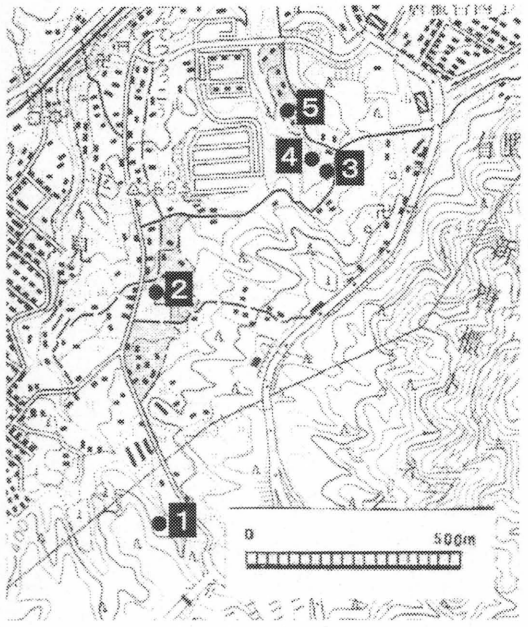
小川敬司氏（大正 13 年生）によれば，小川家の北西にあった。藤ケ谷川の水をいったん池に溜め，その西の一段低い土地にあった水車小屋に利用した。小屋の面積は６～７坪。ハケは２。大水害で壊れたあとは小屋に入って，２本の杵の１本を足で踏んだ。自家用の飯米を搗いていたが，祖父の話では灘へ持って行ったという。なお，①の四鬼家から小川家にあてた天保９年の文書[8]に，水車と思われる記述がみえる。

③ ゴヘエの水車

東本勲氏（明治 44 年生）宅の北の田にあった。自家用の小さなもの。④と同様，降水があれば稼働したが，続けて２臼は搗けなかった。

④ ブンザエモンの水車

③の西で，東本純一氏（大正４年生）方の田にあった。５坪程度。②と同様，ハケは１つで，雨が降ったときだけ，稼働した。



第2図 有野町上唐櫃の水車旧所在地
（●1～5）

⑤ 下野の水車

下野勝弘氏宅の西で，東谷川との間にあった。ハケは１つ。昭和 25～26 年頃まであったか。③・④の水車より先になくなった。

２） 下唐櫃

下唐櫃を流れる溝は，奥山川上流にかかる合ノ本橋付近から取水され，奥山川右岸（東側）を北流し，ニシミゾ（西溝）・ナカミゾ（中溝）・ウワミゾ（上溝）に分流する。

① 辻井巳代治家の水車

現在の下ノ川橋の南西詰にあった。現在も米穀商を営む辻井家の所有。昭和 10 年代まで存在し，ハケは約 50 あった。ほとんどは，灘の酒米用で，六甲山南麓まで，牛車で搬出した。奥山川上流からの溝を水源とした。上掛け式。小屋は東西に長くその真ん中に芯棒が走っていた。下唐櫃では大きな水車の一つで，しかも比較的遅くまで残っていたので，多くの人の記憶にある。旧版地形図（明治 44 年発行）記載のものか。ただし仮製地形図（明治 20 年製版）には記載がないので，明治の中頃以降の創設と推測される。

② 辻井寛治家の水車

辻井寛治氏（昭和５年生）宅の東にあった。下野川橋東北から取水し，下唐櫃公園の位置をトユで渡ってきた。②・③・④は，同じ溝を上流から使った。東西方向の小屋の真ん中に水輪があり，東西方向の軸の両側に，120 ほどハケが並ぶ大きな小屋であった。小屋の内部は地面からかなり深かった。馬を飼い，灘地方に出荷していたとのことから，酒米用と思われる。職人が３人ほど寝泊りしていたが，詳細は不明。大水害で破損。

③ 新兵衛車

奥山川の右岸で，下唐櫃公園の北約百ｍの所にあった。かなり大きいものだったが，大水害で土砂に埋り，廃絶したようだ。規模から酒米用と考えられる。仮製地形図（明治 20 年製版）記載のものか。旧版地形図（明治 44 年発行）

記載のものは，②か③であろう。

④　半助車

西田寿美子氏（大正 15 年生）によれば，西田家の屋号から半助車と呼ばれた。創建年代は不明。ハケが 50 ほどの大きな小屋であった。有野川の右岸（南側）で，水輪は外にあった。西田氏は小屋の中に入ったことがないが，製材作業でできる木片や粉が藪に捨てられていたから，製材用に使われていたのではないかという。有野川の川幅は，大水害までは現在の３分の１程であった。水車小屋の半分は河川敷になってしまっている。大水害で壊れ，廃屋になったか。仮製地形図（明治 20 年製版）記載のものか。

⑤　四郎兵衛車　（字弥五郎垣）

新井昇氏（昭和７年生）によれば，新井家が所有し，その屋号から四郎兵衛車と呼ばれた。神戸電鉄有馬口駅の有野川対岸，現在山脇延吉の筆になる水難碑が建立されている 20～30m 北，有野川左岸（西側）にあった。有野川上流から溝で導水した。ハケは 80～100 というが，具体像は不明である。新井家は昇氏の父の代まで，吉川や淡河の農家と契約して購入した酒米を精白し，灘地方の酒造家（複数）に販売していた。この水車に関して，新井昇氏から神戸市有野更生農業協同組合に寄託された４点の史料[9]がある。それらから，明治 22 年，六甲山地南麓・石屋村の酒造家若林常右衛門が弥五郎垣に水車小屋を新築したが，大正２年に唐櫃村の新井眞八郎に売却したと考えられる。大正２年の登記済証によれば，建坪 40 坪，臼は 50 であった。

⑥　山王神社東の水車

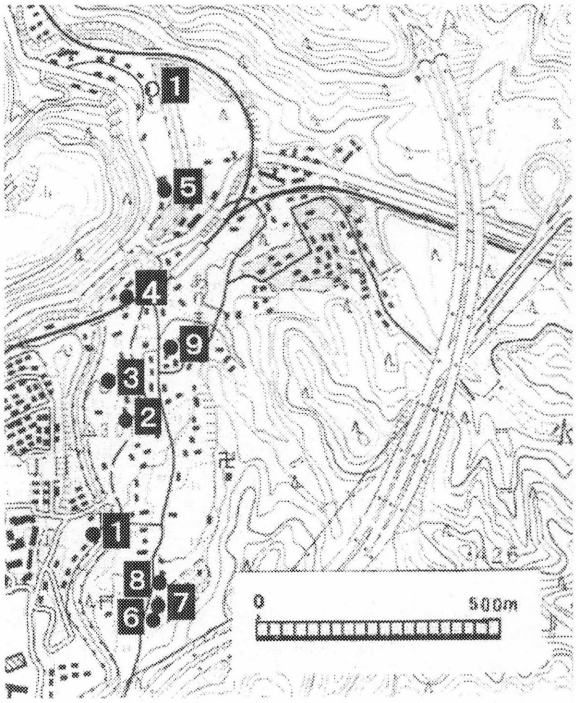
山王神社前の道を隔てて東に，道に面してあった。ハイキングコースのガイドブックに「村はずれに鎮守さまがあり，水車がのどかな音をたてて回っている」[10]とあり，昭和 30 年代稼働していたことがわかる。その後も溝の遺構が残されていたが，平成 14 年溝の擁壁をコンクリート化したため，消滅した。水輪の下に水をかける方式だったか。

⑦　南前の水車

⑥のすぐ下流にあった。現在，小屋の位置に農機具置き場のプレハブがたつ。ハケは４。１日に米２斗を搗いていた。南前通夫氏（昭和３年生）によれば，小屋の中に黒板があり，利用時間の予約を書くようになっていた。数軒の自家用精米のものであった。

⑧　キッタ車

南前家の所有であった。水車小屋の原型を保って住居に転用されていたが，現在では，その敷地に民家が新築されている。酒米用で，⑥・⑦よりも規模は大きく，トユもかなりの高さを通していた。ハケは 20～30。働く人が宿泊するための部屋もあった。南前通夫氏によれば，自家用の飯米は⑦の小屋で搗いていた。



第3図　有野町下唐櫃･百間樋の水車旧所在地
（下唐櫃●1～9，百間樋○1）

⑨　ウワ溝の水車

北浦久司氏（昭和 12 年生）宅のすぐ東にあった。約 10 軒の共有。ハケは5。南からウワ溝の水を 15mほどトユで導水し，上掛け式であった。

2　有野

1）　百間樋（ひゃっけんどい）

①　榎畑の水車

百間樋の榎畑重太郎氏が経営。かなり大きな水車で 12～13 ハケ，白鶴の酒米を精白していた。戦争中になくなった。現在も榎畑家にギアが 2 個残る。旧版地形図（明治 44 年発行）にある。

2）　五社（ごしゃ）

『有野町誌』[11]によると，次の記述がある（原文縦書き）。

> 五社の郷土誌によると五社には，明治に入るまでわずか一ケ所だったものが中期を過ぎると上車，中車，下車と呼ばれる三つの水車と，木次旅館近くに上新場，下新場といわれる水車など合わせて七つが稼働していたという。

①上車（かみぐるま）　②中車（なかぐるま）　③下車（しもぐるま）

上車は神戸電鉄五社駅の山側，中車は五社駅のホーム前の線路あたり，下車は現五社寮の位置にあった。上車の石組みは現在も残る。上車の山側を少し上がったところに溝があり，水を引いていた。

父親が五社の上車のローソであったという前北光治氏（明治 42 年生）によると，①～③はいずれも切田学人氏の所有であった。上車は八多の村上平ゾウ氏が借りて経営していた。中車・下車の経営者は不明。臼はそれぞれ 30 ほど。用途は酒米用。この地域で耕作していた山田錦を精米し，灘へ送っていた。

一方，五社の岡田一幸氏（大正 11 年生）によると，①～③と切田家の関係については不明である。上車は当坂酒造，中車は五社の森家，下車は百間樋の榎畑家が経営していたという。

旧当坂酒造の当坂勝美氏（大正 15 年生，八多に在住）によれば以下の通り。上車は当坂酒造のもので，現在も土地は当坂家の所有である。また上車で精米したものを百間樋の酒蔵（現当坂酒店）に運んで醸造したと聞いているが，電気が通じてからはモーターの精米機にかわったらしい。当坂家の庭には上車の石臼が 3 個残る。

④　上新場（うえしんば）

岡田一幸氏（大正 11 年生）によると，レストラン「食楽堂本舗」の位置に木次旅館という木賃宿があり，その隣に水車があった。前北悦三郎氏（明治 3 年生）の経営。前北氏は若いとき辰馬酒造で働いていた。酒米用で，20 臼ほどあった。大正に電気が通じてやめた。

⑤　下新場（したしんば）

同じく岡田一幸氏によると，五社の旧道の入り口をドンと下がったところにあった。五社の郵便局長を勤める前北家の経営。20 臼ほど。酒米用。土壁の水車小屋で，水車をやめてからは人が住んでいた。

⑥　松本の水車

理髪店の裏で今も溝が残る。岡田一幸氏によると，五社の松本米穀店（現在は廃業）の精米用の水車。20 臼ほどあった。小屋は 5 年前くらいまであったが道路の拡幅時に撤去された。

3）　堀越

①・②とも岡田利一氏（大正 6 年生）と末子氏（大正 11 年生）からの聞き取り。

①　九里田（栗田）の水車

堀越小橋北詰にあった。柳谷の辻下巻太郎氏の土地。水源は池ノ谷池で水量が十分あり，年中使えた。柳谷と堀越の両方が共同で使用し，年末には辻下家に「年貢」（使用料として，米 1 升程度）を納めていた。臼は 1 つ。2 つあったかもしれないが使っていたのは 1 つだけだった。戦争中は米を盗まれることもあった。末子氏が嫁いできた昭和 18 年に動いていたのは確か。機械になって水車は使わなくなったが，小屋は昭和 55 年の堀越川河川改修工事のときまであった。

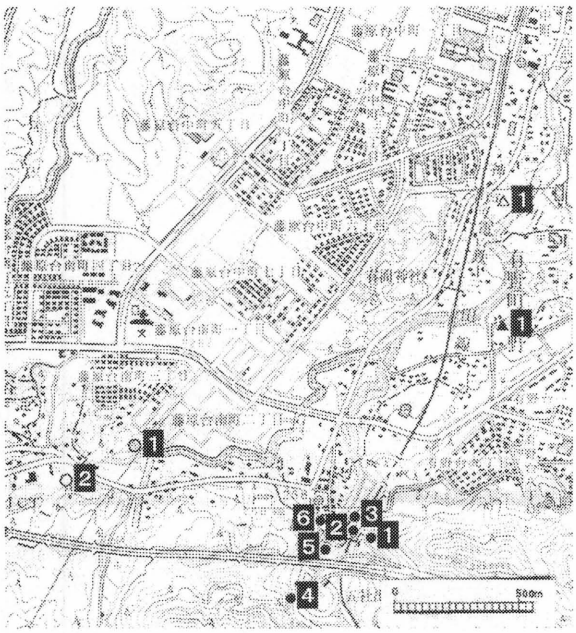
② 池ノ谷（いけんたに）の水車

柳谷と堀越の両方が使用した。土地は岡田明氏のもの。飯米用で2臼あった。水は池ノ谷と奥沢の水を使っていたので 1 年中稼動していた。池ノ谷の方が九里田の水車よりもあとまで使っていた（昭和 25～6 年頃か）。

4） 切畑

① 切畑の水車

小西まつえ氏（大正 3 年生）によると，水車は北向き地蔵の向かい，川の左にあった。河川改修のため，現在地蔵の位置は変わっている。水車小屋があった土地の所有者は下浦・辻井・溝下の 3 家だった。1 坪ほどの場所に臼が 4 つ。婦人会が管理し，曜日によって家（複数）の割り当てをしていた。夜も提灯をつけて作業した。米の盗難があったので見張りをつけた。下浦冨子氏が昭和 24 年に嫁いで来たときには水車は使っていなかったという。明治 3 年の「半原藩領切畑村年貢皆済目録」[12]に切畑の水車と思われるものの記述がある。



第4図 有野町五社・堀越・切畑・西尾の水車の旧所在地

（五社●1～6，堀越○1～2，切畑▲1，西尾△1）

5） 西尾

① 西尾の水車

前北光治氏（明治 42 年生）によると以下の通り。前北福松氏（明治 11 年生）が所有していた。臼は前に 2，後に 2，合計 4。田圃に水が必要な夏は使えなかった。どこの家にも足踏みの臼があったが，しんどいときは踏み賃を払って使わせてもらった。水車で搗くと時間がかかり，この辺は人目がないので米が盗まれることもあった。水車は今から 55 年くらい前まではあったと思う。現在その場所は南部家が購入し，南天を植えている。

6） 岡場

岡場については，①のコウジャグルマ以外は細井忠夫氏（大正 9 年生）による。なお明治 3 年の「半原藩領岡場村年貢皆済目録」[13]に旧岡場村の水車について記述がある。

① コウジャグルマ

前北光治氏（明治 42 年生）によると，前北氏と同年代の男性が 5～6 人働いていた。早くに断絶したらしく，大正以降に生まれた人からは存在を確認できなかった。

② 岡場橋西水車

岡場橋の手前西側に 4 臼の水車があった。精米所。

③ 東岡場共同水車

岡場橋を渡って仲家の下の川沿いに，岡場東地区専用水車 6 臼があった。大水害により流失。以後電気精米機を共同設置した。

④ 前切の水車

前切家が所有。自家用兼 2～3 戸で共用。

⑤ 二階の水車

旧二階林治氏宅横（現甲北病院）に 3 臼あった。二階家所有。10 戸で共用。

7） 馬場

岡場と同様，細井忠夫氏による。

① 萱の木元水車

旧西浦栄治宅東方 100m（現マンション）で 2 臼。西浦家所有。10 戸の共用。

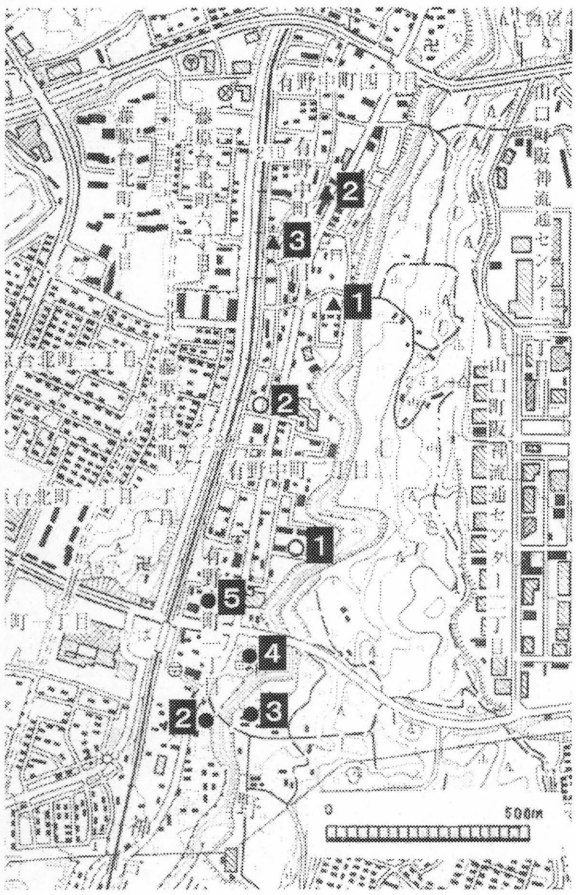
② 畑中の水車（または坂口の水車）

坂口米穀店4代目の坂口昭二氏(昭和2年生)によると，坂口米穀店の水車でヘブタニの付け根にあった。昭和10年頃はあったが，13年の水害の頃にはなかった。昭和10年頃にモーターになった。

8） 結場（けちば）

① 細井の水車

細井家は庄屋も勤めた旧家。現在，細井家前の駐車場は盛り土がしてあるが，かつては田圃で，4mくらいの落差を利用して水車を稼動させた。水は大井を利用。土地は細井家のものであったが，水車は8軒が共同で利用。細井家は



第5図 有野町岡場･馬場･結場の水車の旧所在地
(岡場●2～5, 馬場○1～2, 結場▲1～3)

他の7軒から，使用料を1年に合計1斗もらっていた。飯米用で，米用・麦用・予備用の3つの臼を使い分けていた。昭和28年には動いていたが，共同でモーターの精米機に変えたため30年ごろにはなくなった。細井家の庭に，石臼が残る。仮製地形図の有野川西岸のものか。

② 武田の水車

現在のセラーハウス有野店あたりにあった。武田家は代々庄屋を務め，大名貸しもおこなっていたが，明治維新で貸し金が回収不能となり，家運が傾いた。『有野町誌』[14]には武田分家の写真が掲載されており，菜種をしぼった水車小屋らしい建物も写っている。分家は大正末期取り壊されたのでそれまでの撮影であろう。早く断絶したため聞き取りでは確認できず、水車の詳細は不明である。

③ 橋本の水車

細井忠夫氏（大正9年生）によると，精米業をしていた橋本家の所有。細長い小屋に10臼くらいあった。

9） 田尾寺（たおじ）

① 田中酒造

水車は田中家（田中酒造）の北側の塀沿いに有野川方向へ，敷地の角から有野川へ下ったところにあった。田中酒造は安政年間創業といわれている。田中千年世氏（大正14年生）によると，昭和34年に田中家へ嫁いできた時は，もう水車はなく小屋が残っていた。水車は昭和13年の水害で流れたと聞いている。酒造は20年程前にやめたが，酒蔵1棟と洗米・蒸しに使った小屋が残る。当時は浜坂や温泉町から5～6人の蔵人が来ていた。

また，17歳のときから水車で働いていていた川上勲氏（大正12年生）によると以下の通り。水車担当の雇い人は自分のほかに1人。蔵人は5～7人，瓶詰めは常雇いではなく，田尾寺の若い衆が声をかけられてその都度手伝いに行った。水車は6mくらいで，心棒にギアが6つあった（現在も田中家で保存）。川上氏が働きだした頃は，2石張りの清水式精米機を使ってい

た。それ以前はカラウス使用。水車をやめてからはモーターで精米した。水車へ降りる細い坂道を，俵を担いだり，牛に引かせたりして酒米を運び込んだ。田中家の屋敷から有野川におりる階段は，かつては土と板で水車小屋の中にあった。精白が終わった米をこの階段で担いであがり，洗米に回した。水量が減り水車の動きが緩やかになると，「見てこい」といわれよく自転車で溝をさかのぼった。12 月から 3 月半ばまでは，田中酒造に泊り込んだ。食事・風呂付で日当は 76 銭。12 月から 3 月中ごろまでは酒米を精米し，3 月中旬以降は西尾・結場の人が俵で飯米を運び込み，踏み賃をもらって精米した。

② キタモト寝装

キタモト寝装店は，大正 2 年創業。淡河・三田・名塩，遠くは大阪府池田まで大八車を引いて商売していた。商品として布団を扱いだしたのは昭和 30 年代ごろからで，それまで打ち直しの仕事がほとんどで一部仕立てるときの布を扱っていた。

キタモト寝装の主人のおば（大正 11 年生）によると，水車は戸崎にあり綿打ちは家族だけでやっていた。10 歳年上の姉が綿を打つのを，自分は弟（キタモト寝具店の先代）を背負ってよく見ていた。綿打ちのほかに， 飯米の賃搗きもした。渇水期は休止するような水車で，動力がくるとすぐに水車はやめた。そのあとも小屋は残っていたが，大水害で流れた。

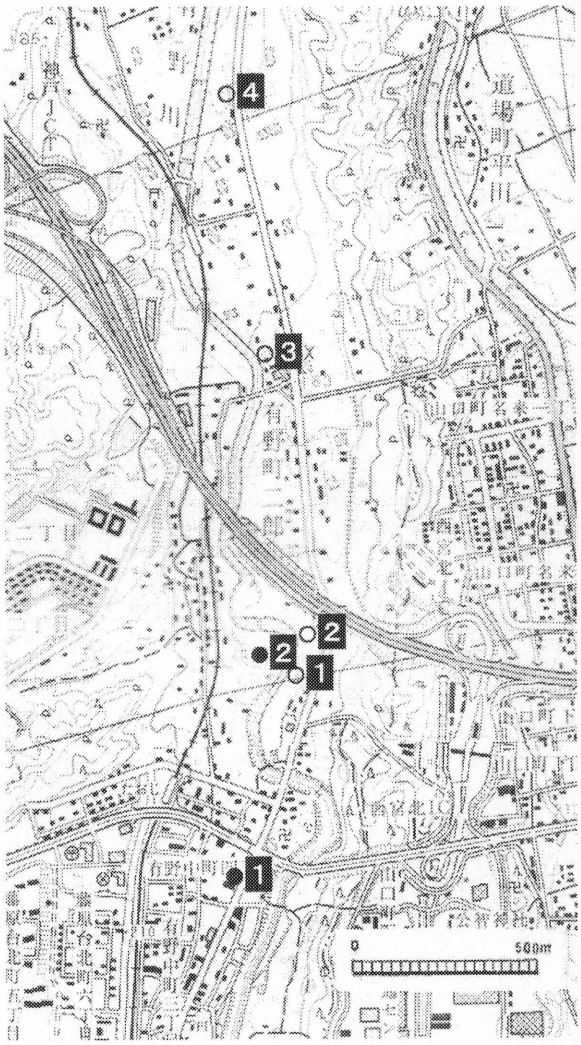
坂元保氏（昭和 12 年生）によると，布団の打ち直しで足す綿も，キタモト寝装で作っていたのではないかという。

10） 東二郎（ひがしにろう）

① イバヤシの水車

イバヤシは字名。芝敏男氏（昭和４年生）によると，現在の川田鉄筋の駐車場の位置にあった。30～40 ハケあり，農家の次男・三男が 5～6 人働いていた。酒米用で，精米した米は牛方に引かせて灘へ運んだ。酒米が終わると飯米もした。土地は伊勢講のものだったと思うが，小屋は灘の酒造メーカーが持っていたのかもしれない。灘が電気で精米をはじめてからなくなった。

また，坂元保氏（昭和 12 年生）によると大水害前までは大きな水車小屋があった。酒米用で冬場は 5～10 人の男衆が泊り込みで働いていた。父親の惣太郎氏も若いときは働いていたという。牛車に引かせ，平野を経て灘へ運んだ。



第6図 田尾寺･二郎の水車の旧所在地
（田尾寺●1～2，東二郎○1～4）

② 名称不明

小南省三氏宅の下。坂元保氏（昭和12年生）によると小学校低学年のころ水車に乗って遊んだ。水車は上掛け式で臼は10ほどあった。溝は上涌（ずわく）を使った。イバヤシの水車が，終戦前後の水害で流れたので，坂元惣太郎氏（保氏父）と番匠福松氏とで作った。飯米用で，上二郎村の人はあいていれば誰でも使えた。2斗入りのニナイタテ（わらで作った入れ物）に籾を入れて，2つを振り分けにして，水車小屋までの急な坂を下った。米のほか，麦も搗いた。また精米の合間はベルトでつないで，木製の縄ない機械の動力にも使っていた。夏は田圃に水がいるので使用できなかった。使わない期間は，解体して防腐剤を塗って保管した。11月ごろ組み立てて，5月ごろまで使った。電気精米機の普及で水車はなくなった。

③ 名称不明

兵庫興農のところ（西敏明氏宅の下）にあり，大きかった。芝敏男氏（昭和4年生）によると，水車小屋は50坪ほどの細長い小屋で，昭和10年頃まであった。

米沢孝実氏（大正14年生）によると以下の通り。水車は飯米用で，左右に4つずつ8臼。溝は下涌（ずわく）を利用。この地域は二郎の芝家の土地だったから，芝家が関係していたか。20歳で兵隊に行った頃に共同でモーターを購入してからなくなった。ここの石臼は米沢氏の庭にある。

④ 名称不明

同じく米沢孝実氏によると，地主が落差を利用して小さな水車を持っていた。地主が大きな水車を共有する場合もあった。自分が使わないときには小作に使わせた。

北摂ガーデンハウスの位置にあった水車は飯米用で，3m×4mほどの小屋に臼が4つあった。水車の直径は約2.5m。水車の使用期間は11月～5月だけだった。この地域は東山家の土地だったから，水車も東山家のものか。電気精米機を使うようになり，なくなった。

11） 西二郎（にしにろう）

『有野町誌』[15]では1ヶ所あると記載されているが，今回の調査では確認できなかった。

3 道場

1） 平田

① 木下の水車

西川沿いにあり3軒ほどで使用していた。規模は不明だが，昭和7～8年頃まで酒米や飯米・豆にも使用されていた。昭和10年頃から電気を使用したという。

② 中前の水車

日下部居住の中前秀雄氏（昭和7年生）によれば，曾祖父の時代，平田（西之垣内の田中酒店隣）で有馬川東の溝を利用し米搗きの仲買をしていた。規模は不明。六甲山地を越えて阪神方面へ出荷していた。

2） 日下部（くさかべ）

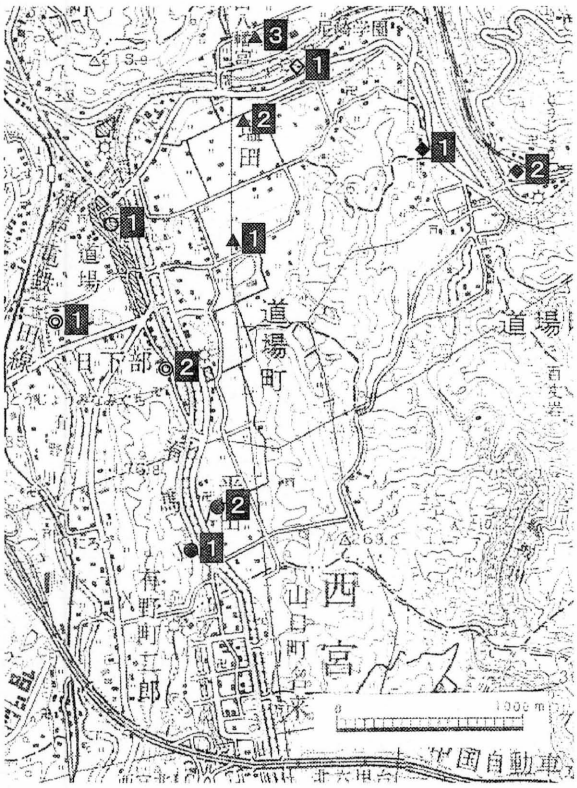
この地域は南の有野地域から続く農村地帯で，現在も田畑が点在している。昔から水量が少ないため，東の塩田と水利をめぐり話し合ってきた。近年「享保十四年の水源の証（奉行立ち会い）」の資料が発見されたが（西林寺に収蔵），「塩田・日下部の地は一晩おき（晩六時～朝六時）に水を引くこと」の記述があるという。昼は平田が使用したものと思われる。その後いくつかの溜池もつくられて現在に至っている。

① 共同水車

近隣の家で飯米搗きに使用。現在は資材置き場となっている。日下部地区の土地改良事業に詳しい樋口広義氏（昭和6年生）によれば，有野川の昭和橋付近の前溝から引水した。

② 米田の車屋敷

米田寿氏（昭和7年生）によれば，米田家は明治年間米屋を営み，その精白用に使用。現在豊南パック向いの位置。ハケ数は不明（ただし複数）。生瀬（西宮市）にまで売りに行ったという。米田家は車屋敷と呼ばれており，水車を所有していたことがわかる。有馬川，沖代池からの水を使い上掛けであった。



第7図　道場町の水車旧所在地
（平田●1～2，日下部◎1～2，道場河原○1，
塩田▲1～3，南所◇1，生野◆1～2）

3）　道場川原

①　泉仙の水車

道場町史編纂に携わる宇津寛氏（昭和７年生）・一文字肆氏(昭和 11 年生）によると，道場町は古くから農業が盛んで，「塩田餅」の原料などになった良質の米がとれた。宿場町としても栄え多くの商店があり，造酒屋もいくつかあったので水車を稼働していたという。旧道場川原（現道場町道場）の道場郵便局裏，酒店泉仙（泉屋仙助屋敷跡）には溝も残っているが詳しいことは不明である。

4）　塩田

①　塩谷の水車

旧版地形図（明治 44 年発行）に記載。新池の北を流れるダイドウユの水流を利用した。谷秀雄氏（大正 13 年生）の家屋西の田圃の位置。谷氏の父の兄弟が養子に行った先（塩谷家）が米屋を営んでおり，その精白用に所有していた。新池からダイドウユの脇の上を樋で流し，水輪の上からかけるようになっていた。冬季はその樋から漏れた水がツララになり，子ども達が叩いて遊んだ。水輪は小屋の中にありその両側に芯棒が通っていた。

谷氏によれば，有馬軽便鉄道の新道場駅から米を搬出した。駅まで馬力で運ぶ専属の牛屋が２～３軒あった。飯米・酒米を搗いていたが、塩田の飯米は「塩田餅」の原料として有名だった。塩田が餅米に適した土地であったことと，山脇延吉が餅米の生産を奨励したことがその原因。

②　大前の水車

字東城谷（ひがししろや）にあった。西からの溝を分流して水車を回し，また元の溝に水を戻した。自家用の飯米を搗いていた。塚本正氏（大正６年生）によれば，自分が小学校入学前の大正 13 年頃，畔焼きの火から焼失した。

③　川北の水車（前の水車）

現在の塩田八幡の参道入口，駐車場の場所にあった。塩田で一番知られた水車で，旧版地形図（大正２年発行）にもある。ハケについては番匠延治氏（大正 11 年生）のように 30 から 50 あったという人から，４～５という人まで幅があるが、大規模だったのは事実であろう。月見橋の北東からの農業用水を利用していた。前家は米を専門に扱い，その精白用であった。一家は水車小屋で起居していた時代があったという。生野からも精白に来る人が多くいたが，そのうちの１人仲谷修氏（大正 11 年生）によればこの水車の動力で縄ないもやっていたという。

5）　南所（みなみんしょ）

①　中の水車

有馬川右岸で東矢木工の位置。沖代川からの溝で引水。元の所有者にあたる中義弘氏（昭和 28 年生）によれば２斗入る石臼が８個使われて

いた。大正 10 年前後に放火で全焼し，その後再建したが第二次世界大戦前の台風で倒壊した。

生野の仲谷修氏（大正 11 年生）によれば，中家の水車は賃搗きをやっていたから自分の家の米も大八車で運んだ。上掛け式の記憶で昭和 15～16 年頃まであったという。

6） 生野

① 喜多の水車

喜多家の土地（現在は大東家所有）で，自家用飯米を搗いていた。喜多家のすぐ東の井戸水を会所に引き，いまも残る喜多家の北の小さな池に溜めて水車に利用した。以前池はもっと大きくて澄んでいたという。現在も池の傍らに４つ，喜多家のすぐ東の斜面に１つ，臼が置かれている。K氏（昭和 10 年生，女性）によればその他にも１つか２つを人に譲ったという。それらが全部使われていたとすれば平均的な大きさの水車小屋になるが，大西守氏（大正８年生）や仲谷修氏（大正 11 年生）によれば，臼は一つか二つであった。昭和 30 年以降水車小屋を解体し，大東家の居宅がたった。規模は現在の大東家の４分１程度であった。

なお大西守氏によれば，水輪から芯棒が出ていたのではなく，水輪に直接杵の棒がかかっていたというが，それが可能かどうかは不明である。

② 水車跡

生野橋の東詰北に生野駐在所がある。その東の一段低くなったところを「水車跡」と呼称する。大西俊子氏（大正 14 年生）などによればその名称から水車があったのではというが，不詳である。なお，大西氏によれば，生野の多くの家に足踏み式の臼があり，米のほかに干鰯も踏んでいた。旧版地形図に記載。

V おわりに

有野川流域の水車について，調査結果の概要を前稿の山田川流域と比較して，まとめておこう。

1 酒米について

1） この地域でも山田川流域と同様，下唐櫃や上唐櫃を中心に六甲山南麓の酒造地帯に精白した酒米を搬出していたことが判明した。とくに下唐櫃の四郎兵衛水車のように灘の酒造家自らが小屋を建設・稼働したものは山田川流域ではなかった例として興味深い。人的なつながりを含めて，土地の貸借関係や水利権に関して，部外者が設置できる条件が整っていたからであろうが，六甲山地南麓の酒造業者側の資料からも，調べる必要がある。

2） 酒米については他地域に搬出するだけでなく地元（五社の当坂酒造，田尾寺の田中酒造）で消費する酒米用もあった点が山田川流域と異なっている。

2 酒米以外

1） 下唐櫃の半助水車について，製材も行っていたのではとの聞き書きを得た。唐櫃にはいまも林産組合があり，その可能性は大きい。山田川流域にはなかった例である。

一方，林産組合があり山田川流域に隣接する地域であるにもかかわらず，山田川流域ではさかんであった杉線香用のものが１基もなかったのは，奇異な感じがする。自然的条件以外の社会的条件（たとえば流通経路・技術の伝承など）の違いによるものであろうか。

2） 田尾寺では綿打用に使用されていた。具体的な姿までは把握できていないが，綿打用は山田川流域ともあわせて，この地域では１例だけである。水車はその土地の産業・生業と深く関わっていることは知られている。前述の製材用とともに，この地域でそれを確認できた好例といえよう。

3 水車の部材

水車の部材が２カ所（百間樋と田尾寺）に保存されていることは注目される。山田川流域では，上谷上「尾崎の車」（2003 年取り壊し）と下谷上「有馬の水車」のように小屋が転用された例があったが，部材の保存はなかった。

かつて多くの土地で見られた水車であるが，

地域の変貌や実際に見聞した人たちの老齢化のため，調査が困難になっている。しかし早期に，隣接地域とくに有馬川流域の西宮市山口町や神戸市北区八多町・淡河町なども調査すれば，この地域の水車の特性，ひいては地域性を把握できよう。

付記

今回の調査にあたって文中記載した方々のほか，現地（唐櫃）に同行いただいた中島堅次氏，文書解読で協力いただいた木南弘先生，前稿から種々ご教示いただいている末尾至行先生に感謝申しあげる。なお，本稿は 2003 年 11 月 29 日兵庫地理学協会 11 月特別例会(於：甲南大学)での発表を改稿したものである。

注

1) 永田　實(1992)：神戸市北区山田川流域の農業水利の現状，兵庫地理 37，86－101

2) 永田　實(1993)：神戸市北区山田川流域の水車—明治期から昭和初期にかけて—，兵庫地理 38，55－68

3) 一橋大学経済研究所附属日本経済統計情報センター編(1990)：『徴発物件一覧表』，クレス出版

4) 有野村誌編纂委員会編(1948)：『有野村誌』，有野解村処理委員会

5) 神戸市有野更生農業協同組合編集発行(1988)：『有野町誌』，323－324

6) 若林泰氏を偲ぶ会編（1994）：『若林泰所蔵資料２　播磨千本組大庄屋と摂津有野村戸長役場の戸文書』，若林泰氏を偲ぶ会，93－132

7) 前掲注 5)

8) 文右衛門（四鬼家の屋号）から宇兵衛（小川家の屋号）に出されたもので，溝を流すことについて支障があれば止められてもよい旨の覚書である。文中の「志□車」は水車のことと推測される。

9) ①明治 22 年３月 15 日付の唐櫃村の西向梅吉と西田音吉から御影町石屋村の若林常右衛門に出した契約書②大正２年５月３日付で御影町石屋村の若林常右衛門から唐櫃の新井直八郎に出した「建物売渡證」③大正２年５月 15 日付の「登記申請書」④大正２年５月 15 日付「登記済証」

10) 日本交通公社大阪支社（1956）：『峠と高原の旅』

11) 前掲注 5)

12) 前掲注 6) 124－125

明治３年の「半原藩領切畑村年貢皆済目録」では「一金弐歩　添水車冥加金弐口」の記述がある。解説によれば，切畑村の年貢には金納・米納・蔵納のほか，「本田畑に対する夫役金，水車冥加金，預け米の上納があった」。水車冥加は明治３年には金だが５年には銭に変わり，６年分にはなくなっているが，「皆済目録に記載されないこともあり，ただちに水車がなくなったとはいえない」とする。ただし，この文書に残る水車が切畑の水車そのものかどうかは不明である。

13) 前掲注 6) 129－132

明治３年の「半原藩領岡場村年貢皆済目録」に「一　金壱分　添水車冥加金」とある。解説によれば，これらの資料から明治４年の免状には水車免許税の記載はないが水車はこれ以前からあったこと，明治６年には水車免許税25銭が賦課されていたことがわかる。

14) 前掲注 5) 558

15) 前掲注 5)

（ながた　みのる・兵庫県立神戸高等学校）
（いしかわ　てるこ・兵庫県立神戸北高等学校）
（これなが　めぐみ・神戸市立北神戸中学校）